



医療の現場から

from the medical front



院内には北海道脳神経外科
記念病院設立の原点となる
想いが掲げられている

医療機関と連携しながら、経過観察をおこなっています。患者さんが病院を歩き来ても問題なく、安心していただくためには、紹介への返事を丁寧に、正確に書くということが大事です。当然のように聞けるが、早期の「丁寧」で「正確」な返事にこそ、脳神経内科の専門医だからできることがある。

「脳神経内科専門医は神経学的診察方法のトレーニングを受けています。パーキンソン病の診断に関わる神経学陽性所見を早期に捉えられることが多いため、他の類似疾患との鑑別にも関わることがあります」。紹介状に添える3テスラーのMRI、SPECT（脳血流検査）、DAT scan、MIBG心筋

シンチなどの画像検査がより診断精度を高めている。医師の神経学的診察による診断に加え、より早期に、正確な診断をするための最新の医療機器・設備が充実している同院は、地域医療の中核を担う、頼られる存在となっているようだ。

地域医療の

一翼を担う病院をめざして

設立以来、地域医療を支え続けてきた北海道脳神経外科記念病院が、2005年から継続して開催しているのが「病病・病診連携会」だ。最新の研究成果や臨床成績を地域の病院や診療所と共有し、連携を図りながら患者に最適な医療を提供するための場としてスタートした。参加者は医師を中心として、看護師や薬剤師など広く札幌市内外の医療従事者に参加を呼びかけている。

「開催にあたっては、直接手紙で参加を呼びかけています。以前は年1回の開催でしたが、病診連携と地域医療の重要性を考え、今は勉強会という形で年3回開催するようになりました。多い時には1回あたりの参加者が60名を超えることもあります。今後は近隣にお住まいの方にもわかりやすい市民講座のような講演会ができれば良いと考えています」

感染症拡大の影響を受け、現在はオンラ



医療の現場から

from the medical front

Interview with
Akihiko
Ogata

地域を支える 充実の医療提供をめざして

〔前編〕

脳神経外科の草分けとして、1983年に設立された北海道脳神経外科記念病院。人口約200万人の札幌市で、北海道大学に次ぐ規模の病院として地域医療を支え続けている。認知症やパーキンソン病患者が約50%を占める同院では、早期診断・早期治療を目指し、地域の病院や診療所と連携した取り組みを続けている。今回は、地域連携について、また神経学の専門医だからできる早期診断のありかたについてお話を伺うために、脳神経内科の副院長でありパーキンソン病研究センターのセンター長である緒方昭彦氏の元を訪ねた。

緒方 昭彦氏

PROFILE

北海道脳神経外科記念病院脳神経内科 副院長/パーキンソン病研究センター長併任
北海道大学神経内科非常勤講師/北海道医療大学薬学部特別講師

学歴	1981年3月	北海道大学医学部卒業
	1985年7月	北海道大学医学部脳神経外科・神経内科診療班にて研修
	1986年4月	神経内科専門医取得
学位	1990年3月	北海道大学大学院医学研究科病理系入学
	1990年3月	北海道大学大学院医学研究科修了
	1990年3月	日本脳炎ウイルスの研究にて医学博士（北海道大学）
職歴	1990年4月	釧路労災病院神経内科科長
	1993年7月	北海道大学医学部助手（医学部生化学第一講座）
	2002年11月	北海道大学大学院医学研究科助手（神経内科学）
在 外 研 究	2003年10月	北海道大学大学院医学研究科神経内科講師
	2005年10月	北海道脳神経外科記念病院神経内科部長
	2012年10月	北海道大学神経内科非常勤講師
所属学会等	2015年4月	北海道脳神経外科記念病院 神経内科 副院長
		パーキンソン病研究センター長併任
在 外 研 究	1994年6月から1997年3月	Alexander von Humboldt 財団奨学生としてドイツ・Wuerzburg（ヴュルツブルク）大学ウイルス免疫研究所に留学
所属学会等		日本神経学会専門医・指導医、日本神経病理学会（代議員）、病理解剖資格認定医
		日本神経病理学会北海道地方会（評議員）
		日本内科学会 認定内科医・指導医
在 外 研 究		日本認知症学会 専門医・指導医
		MDS-J会員
		アメリカ神経学アカデミー正会員
所属学会等		北海道日独協会 副会長・理事
		ドイツ フンボルト協会会員
		札幌市医師会学術・生涯教育委員

脳神経外科と脳神経内科が 連携して治療に携わる

札幌市の北西部、北海道大学に程近く、近隣には学校が集中するなど、活気ある商業地に位置する北海道脳神経外科記念病院。北海道大学脳神経外科教室の初代教授、都留美都雄氏の退官を記念して1983年に設立された。24時間の救急受け入れから慢性期のケアまでおこなう病院として、北海道の地域医療を支えている。

脳神経外科という科名から、脳の疾患のみを扱うと誤認されやすいが、脳だけでなく、脊椎・脊髄・末梢神経を含めた、神経組織を広く扱う科である。脳神経外科専門病院で、内科系である脳神経内科が診察を一緒にこなうのは、同院が日本国内でも先駆けて取り組んだ診療体制である。「欧米では脳神経外科と神経内科が同じ施設で仕事をすることが多くあり、都留教授の退官を記念してできた当院もその流れを受け継いでいます。脳神経外科と脳神経内科が連携して治療に携わることで、非常に効率の良い環境で神経疾患の診療にあたることが出来ます」。脳神経内科には、今回お話を伺った緒方氏をはじめ、現在専門医7名が在籍。道内では北海道大学に次ぐ規模の診療体制で、最新の脳神経外科手術や、神経難病の診療体制も充実する。

二つの例ですが、転倒で搬送されてきた方

インでの開催に切り替えているが、継続して実施することでの成果は大きいようだ。対面で意見を交わし情報交換を行う。互いに面識をもつことで、患者さんの紹介がしやすい関係が生まれる。さらには、病状が落ち着いた後の継続したフォロー体制を構築しやすく、連携の強化にもつながっている。

後編では「脳神経内科の専門性」について お話を伺います。



北海道脳神経外科記念病院

札幌市西区八軒9条東5丁目1-20

<https://www.hnsmhp.or.jp/>

に硬膜外血腫があつて、脳外科に救急搬送されてくる場合があります。その場合に、外科手術で治療をして終わりではなく、なぜ転ぶのか、硬膜外血腫が起きた原因は何かを脳神経内科で詳しく調べる事ができるんです。診察をするとパーキンソン病であることがよくあります。転倒されているので早期発見というわけにはいきませんが、手術後に適切な治療を進められます。特定疾患の認定を取ってあげて自己治療をしてもらうことで、その方の予後も大きく変わりますから、脳神経外科と内科が共存している意味は大きいと思います」

早期に丁寧で正確な診断を

より安全で的確な診断のために、2012年には新病棟が完成。急性期・回復期リハビリ・障がい者病棟という3つの機能別病棟を設置した。2020年には訪問看護ステーションを開始させるなど、病院としての機能拡充を図りながら、並行して取り組むのが、医療を途切れさせないための地域連携だ。

「初診の場合、救急で運ばれてくる方もいますが、私が診ている患者さんの半分は紹介で来られます。いずれにしても、神経内科の疾患はいろんな病気の早期診断・早期治療が非常に大事です。紹介患者の場合は、診断後、病状が安定すれば紹介していただいた